森吉山の鬼

秋田の三吉は、もと北秋田郡森吉山の巨人で、のち、里に出て百姓になったといわれている。この森吉山にはもと鬼が住んでいたが、気が荒くてときどき人を取って食い、また死人の白衣や白頭巾などを奪い、木の皮にかけておいたので、山の東南に白頭巾沢という地名を残した。

こうして麓の村々が困っているところへ、諸国遍歴の権現さまがやってきた。そして村の百姓たちの願いを聞き鬼に退去を迫った。しかし、鬼はいうことを聞かない。そこで権現さまは、夜中に山の頂上に大きな石を運んで一番鶏の鳴く前に三つ重ねて段をつくればいいが、それができなかったら森吉山にいてはならないといい渡した。そのうえで、権現さまは、アマノジャクに頼み、最後の石を積む前に鶏の鳴く真似をしてもらうことにした。鬼は一生けんめい荒瀬川の大石を運んで、いよいよ三つめに手をかけようとした。ちょうどそのとき、「コケコッコ」と二声三声、鶏が鳴いた。それでも鬼は残念がってぐずぐずしているので、権現さまはこれを追い払った。逃げて行く途中、鬼は一の腰というところで山ウドで滑って転んでしまった。そのときに鬼はウドのカラで目をついてしまい、片目になった。それを見て権現さまはかわいそうに思い、一の腰にとどまることを許した。

森吉山に登るものが七日間ウドを食べてはいけないのもこのためである。ただ、この鬼が三吉なのかどうかは定かではない。